

## リレー随筆

# 「私の修行～病室で念仏を唱えないで～」

鹿児島大学病院 消化器疾患・生活習慣病学分野 岩田 大輝

2020年も早くも後半に差し掛かるうとして  
いる。今年はなんと言っても新型コロナウイルス感染症によって彩られた1年であり、いまだ日本でその猛威は収束の気配を見せない。人類史の中でも後世まで語り継がれるであろう1年となった。この原稿を書いている今はちょうどお盆であり、例年であれば各地からの帰省客で観光地がにぎわい、街中が活気を見せている時期だ。しかし、テレビをつけると全国の知事やキャスターが帰省の自粛を促しており、今年は帰省を控えたという方も多だろう。また、帰省に限らず、夏休みに家族との、あるいは恋人や友人たちとの、楽しみにしていた旅行を残念ながら自粛したという方もいるかもしれない。かくいう私も、沖縄でのビーチパラダイスを昨年から計画し飛行機やホテルを押さえ、新しい海パンまで買っていたのだが、泣く泣くキャンセルすることとなった。学生の頃から旅行が趣味だった私は、仕方ないとは言え、コロナ禍により旅行に行けないことがとても残念である。自由に海外旅行に行けた頃が、遠い昔のことにすら感じる。医師の方の中には、研修医の頃、診療科のローテーションの変わり目でお休みをもらい、夏休みと称して1～2週間ほど海外旅行などにでかけた方も多いのではないだろうか。

私も、時間に加えてそこそこのお金がある研修医時代に、かねてからやりたかったことがある。“修行”だ。何も、今年初頭のTBS系列のドラマの主人公のように、僧医を目指

していたということではない。心身に苦痛を伴うという点では同じかもしれないが、私の行った修行は煩惱にまみれた“マイル修行”なるものである。

既に修行を達成した先輩僧・尼の方や、マイル修行を行う有名人が取り上げられた番組などでご存じの方もいるかもしれないが、少しばかりマイル修行の説明をさせていただきたいと思う。フリー百科事典Wikipediaによると、「マイル修行（マイルしゅぎょう）」とは、航空会社の運営するマイレージサービスにおいて、多頻度顧客に提供される特典の獲得を目的とした、有償航空券による旅行の俗称。そのような旅行をする者は、旅先での観光や宿泊をあまりせずに、短期間で多回数飛行機に乗り続けるため、体力・時間・金銭を消耗するなど、一般的観点からは“苦痛”と思われる行為をすることから、僧侶の修行に例えて「マイル修行僧」と呼ばれる」と記載されている。簡単に言えば、航空会社の「多頻度顧客」すなわち、「上級会員」のステータスを得るために、無意味な航空機の利用を繰り返すことを「修行」といい、「修行」する旅客を「修行僧」と呼ぶのである。

例えば、JALではJALグローバルクラブ(JGC)、ANAではANAスーパーフライヤーズカード(SFC)という上級会員制度があり、これに入会するためにフライトを繰り返す行動が修行と呼ばれている。外資系エアラインの場合は1年ごとにステータスが更新されて、一定の要件を毎年クリアしない限り上級会員

資格を維持できないが、日本の場合は一度だけ条件をクリアすれば、それ以降はクレジットカードを保有するだけで、生涯に渡って上級会員資格を維持できるのが特徴となっている。極端に言えば、一度上級会員の資格を満たせば、翌年以降は一度も飛行機に乗らずとも、生涯VIP待遇をキープできる点がファンタスティックである。さらにJGCはワンワールド（アメリカン航空、ブリティッシュ・エアウェイズ、キャセイパシフィック航空、カンタス航空、フィンエアー等）の上級会員資格、SFCはスターアライアンス（ユナイテッド航空、ルフトハンザドイツ航空、エア・カナダ、スカンジナビア航空、シンガポール航空等）の上級会員資格を保持できるため、提携航空会社でのフライトの際にも至れり尽くせりのベネフィットを享受できることになる。さらに、本会員の家族が家族カード作成すると、家族会員も自動的に上級会員のステータスを得ることができるという、にわかには信じがたい仕組みもある。そしてここからが大事であるが、上級会員の資格を得た暁には、エコノミークラスでも航空会社のラウンジが無制限に使用可、提携航空会社のビジネスクラスラウンジ使用可、毎年初回搭乗のマイルボーナス、フライトボーナスマイル積算率UP、会員専用予約デスク、優先キャンセル待ち、優先搭乗、専用カウンターでのチェックイン、特別レーンでの保安検査優先、国内線・国際線前方座席指定サービス、預け荷物許容量優待、到着空港で優先的に手荷物を受け取れるサービスなどの、旅行好きにはたまらない垂涎の特典を半永久的に享受できるのである。

私は学生時代から、マイル修行をいつか達成し、上級会員ステータスを手に入れることを夢見ていたわけであるが、それ相応に時間とお金を要するものである。そのため、研修

医となってからもその世界へ足を踏み入れることに、ためらいを感じていたのも事実であった。しかしそんな折、心を同じくした同志を見つけることとなる。大学時代の友人T君である。

T君とは名前順が近く、また所属部活が一緒だったこともあり（お互い幽霊部員だったことも含めて）、入学当初から仲良くしていた。特に映画が共通の趣味であり、しょっちゅう二人で映画館に足を運んでいた。余談であるが、映画館で過去の名作を放映する午前10時の映画祭という企画があり、2人で「ローマの休日」を鑑賞しに行ったことがある。大画面に映し出された白黒のオードリー・ヘップバーンに揃って恋をしたことは言うまでもないが、鑑賞後にお互い彼女のどこに惹かれるのか、という話題になった。そこで2人とも「ヘップバーンの胸鎖乳突筋がいいよね（ラテン語：ムスクルス・ステルノクライドマストイデウス）」だったことも、医学生らしい感想である。研修医となって病院が別々になってからは、以前のように一緒に映画に行く機会も減ったが、忘れた頃にどちらからともなく連絡し、飲みに行くような間柄であった。たしかその日も仕事帰りに連絡をとり合い、ふらりと騎射場の居酒屋に連れ立ったのであった。研修医となったT君は、クレジットカードや通販サイトのポイントシステムに精通し、キャッシュバックや優待などを得る「ポイントおじさん」と化していた。私はその方面には疎かったため、彼から様々なお得情報を教えていたが、そんな話の流れから、どちらからともなくマイル修行の話題となった。そして、意気投合し、お酒の力の後押しもあってか、その場でマイル修行決行を誓い合ったのである。

そこからは、いかにして効率よく修行を達成するか、計画を企てる日々であった。厳密

にいうと、“マイル”をためるわけではなく、マイルとは別の概念であるポイント（JALならFOP，ANAならPP）をためることになる。そのポイントは、路線ごとの飛行距離や予約運賃に応じたフライトマイルに連動し、それに各種ボーナス・調整が加味されて、獲得ポイントが付与される。基本的に長距離であればある程、ポイントが貯まりやすくなる。ただし、JAL・ANAは日本の航空会社であることから、ポイントの換算率（調整係数）において日本を最も優遇しており、次にアジア太平洋を優遇している。そのため、修行においては、国内線の長距離、国際線のアジア・太平洋の長距離路線で、価格が控え目のフライトを予約するのが重要なポイントとなる。このため、シンガポールに行っても、ロサンゼルスに行っても獲得できるポイントは殆ど変わらないことになる。国内線は料金のわりにはポイントの獲得数が大きい沖縄路線がおすすめだ。国際線の場合、日本発着便だとクアラルンプール、シンガポール等のアジア路線、オーストラリア・ニュージーランド等のオセアニアが係数1.5倍の真骨頂を發揮して効率的になる。また、プレミアムエコノミーやビジネスクラスのセールが効率的にポイントを稼げるため、修行僧に人気だ。そして、これらを組み合わせた最強の航空券の取り方が、沖縄発着の東南アジアorオセアニア行き航空券である。この場合、途中で羽田空港・もしくは成田空港で乗り継ぎを挟むことになるが、沖縄-羽田（成田）間の航空券は国際航空券の一部のような扱いになるため激安で取得でき、さらにポイントを大量に稼げるという算段である。修行は、あくまで飛行機に乗ることが目的であることを忘れてはならない。このため、ストイックな修行僧は、修行中一回も空港を出ることはない。仮に海外の空港に到着したとしても、その国の地面を踏むこと

なく、そのまま日本行きの飛行機に乗り継ぎ帰国するのである。これを“タッチ”と呼ぶ。修行僧の間で伝統的なコースが「OKA-SINタッチ」というフライト手法である。沖縄（OKA） 東京 シンガポール（SIN） 東京 沖縄（OKA）という飛行プランだ。最短で0泊2日でOKなので、拘束時間が少ないのがメリットであり、土曜の朝に出て日曜日に帰ってくることが可能だ。なかなか長期の休みがとれない方にも向いている。

私とT君は、10日ほど夏休みを取得し、修行の日程を立てた。さすがに10日間の間にタッチを繰り返すことは精神衛生上よくないと判断し、また、エコノミークラス症候群のリスクを少しでも抑えるため、現地での観光も組み入れることにした。最終的に決定したフライトプランが「鹿児島 東京 沖縄 東京 シンガポール 東京 沖縄 東京 クアラルンプール 東京 沖縄 福岡」であった。人間は、ふと賢者のごとく冷静になる瞬間があるが、出発当日の我々は、決して口にはしないが、なぜ普通に旅行を計画しなかったのだろうかという後悔を胸に抱き、鹿児島を飛び立ったのであった。

しかし、その後待っていたのは、予想を裏切る素晴らしい日々であった。修行効率を最大にするために、座席はプレミアムエコノミーにしていたのだが、エコノミーしか乗ったことのない私たちは、座席のリクライニングの角度が少し大きいことや、アメニティに使い捨てスリッパがついていることに、いたく感動した。心優しいT君は、自分の奥さんを飛行機に乗せるときはプレミアムエコノミーにしてあげようと、旅行中何度も言っていた。私は、自分の奥さんはビジネスクラスに乗せてあげたいと思った。

初めに訪れたシンガポールは、自然と化学が融合したような超都会であった。また、都

会であるため物価は安くはないが、ホテルの価格は非常にリーズナブルであった。5つ星の高級ホテルに、駅前のビジネスホテルに泊まるような値段で宿泊できたのは驚きだった。シンガポールにつくまでに既に4回のフライトをしていたが、意外とまだ疲れはなく、マライオン、マリーナベイサンズ、屋台の食べ歩き、植物園、カジノなどを満喫した。1日目は元気であったが、なんせ亜熱帯の東南アジアである。歩き通していたら、運動不足の私たちの体力は早々に限界を迎え、翌日からはgrabという現地の配車アプリでタクシーを使いまくった。使いまくったといっても近場だと日本円で200～300円くらいで移動でき、相乗りになるとさらに安くなるため、現地の移動手段にはかなりおすすめである。

次なる目的地のクアラルンプールは、シンガポールの隣国マレーシアの首都である。しかし、飛行機に乗ることが目的の私たちはいったん日本に帰国し、さらに沖縄を経由した後、再びクアラルンプール行きの飛行機に乗り込んだ。途中、空港の保安検査場で長蛇の列に並んでいるとき、後からやって来た上級会員達が専用レーンで次々に進んでいく様子を目の当たりにし、我々は何としてもこの修行を達成するのだと決意を新たにした。

クアラルンプールに到着し、これまで8回のフライトをこなした我々は、さすがに気力・体力ともに限界を迎えつつあった。空港では、ぼったくりの白タクに危うく乗り込みそうになり、ホテルではチョコレートをあげるからと言われ、追加料金を支払い部屋のアップグレードをした。クアラルンプールではほとんどの時間をホテルでだらだらと過ごしたが、ペトロナスツインタワーやブルーモスク、ヒンドゥー教の寺院など定番の観光スポットを、最後の力を振り絞ってクーラーの効いたgrab(タクシー)で回った。最終日の夜、クアラ

ルンプールのナイトクラブに行くのを2人で密かに楽しみにしていたのだが、翌朝、いつの間にか寝過ごした私たちは、一晩中つけっぱなしにした電球が煌々と輝くホテルの自室で朝を迎えた。ただ、一番精神的にきつかったのはここからの移動で、東京に着いた後、鹿児島に帰りたい気持ちを抑え、無意味に3回目の沖縄行の飛行機に乗り込み、那覇空港からは一步も外に出ることなく福岡を経由して家路についた。

こうして我々は修行を終え、2人の絆はさらに深まり、悟りの領域に達した。修行は航空会社の上級会員というステータスを得るために行ったわけであるが、旅先では様々な出会いがあり、景色、人々、食べ物、においていたるまですべてが未知との遭遇であった。この旅を通して、気のせいだと思うが、私たちは人間としても医師としても少しばかり成長できた気がする。コロナ禍が落ち着いたそのときには、今度は航空会社の上級会員として、VIP旅行を満喫してみたいと思う。

次号は、鹿児島大学脳神経内科 武 義人先生のご執筆です。  
(編集委員会)